

# セピア色の記憶

新潟大学名誉教授 中島民雄

午後5時頃になると外来、病棟、手術場の勤務を終えた若い医局員が三々五々集まり、犬の洞房結節、房室結節の還流実験が始まる。AchやNEを投与するとsinus arrest、nodal rhythmが面白いように現れては消える。実験終了後はビール。昭和48年春、こうして私の新潟での研究生活は始まった。

当時の口腔外科の教授は「オトウチャン」こと常葉先生、医歯大では知らぬ者なき存在であった。飲んだ揚句の不始末で、ブタ箱入りした。時の教授から「ものの善悪も分らんのか！」と大目玉。が、先生に言わせると、「本人は悪いの分かってやってんだから、それを怒るのは怒る方が馬鹿」になる。古いレインコートに、雨傘、長靴姿、お酒がはいると、乗ってきたタクシーの運転ちゃんを自分の部屋に連れ込み、一緒に飲む。先生の日頃の言動には、奇想天外な事が多く、常葉語録として残っている。酔いが回ると、「浮気は本気にならないと、本当の浮気じゃないね。でも、本気になると、それは本気で浮気じゃないね」いつになったら治るんだという癌患者に、「大丈夫、よくなれば治ります」論文原稿を持っていった医局員が怒られて帰ってくる。翌朝、「俺の気分の悪い時に来たあいつが損ね」とくる。一時は腹が立っても、先生の間人まる出しの言葉には、誰もが愛着を感じたものである。自然と先生の周りには、気の置けない人の輪ができ、そんな仲間と飲んでいる時の先生は、何時も至極ご機嫌であった。

あれほどの臨床経験と手術の腕を持ちながら、うまくいかなかったりすると、「まだ勉強がたりないね」と自らを戒めておられた。「臨床はやればやるだけ馬鹿になる」といい、臨床以上に打ち込んでいたのが放線菌の研究で、その苦労話をする時の得意そうな様子は子供のようであった。しかし、病院長職や大学紛争などにエネルギーを擦り減らしてしまったためか、60才にもならずして亡くなられた。

細菌学の近藤先生は医歯大時代からのオトウチャンの酒のみ相手である。どちらがウイスキーのボトルを開けられるか競ってへべれけになり、血反吐を吐きながらも試験管を離さない先生であった。オトウチャンとの縁でわたしもよく飲み連れていかれた。行く先はキッチン二葉。「この肉は旨いんだよね」2か月ほどすると電話が鳴る。「おいしい肉が入ったらしいよ。…」「あっ、わかった。今日は俺が持つよ」と云うと「君、済まないね！」とまたご機嫌で出かける。

人一倍常葉先生を慕っておられ、先生の葬儀の夜はひどく酔っぱらって、とうとうわが家に引き取る羽目になった。ナガスクジラのようになった先生の服を脱がし、女房と二人で引きずって行って寝かしつけた。翌朝、起きてくると、ステテコの上にパンツをはいている。暑いので自分で脱いで、明け方涼しくなったのでそのまま履いたらしい。女房が笑いころげていると、「よくあるんですよ。先日も、電車のトイレに入ったら穴がない。よく見たら後にありました」と真面目顔で答えておられた。「奥さん、朝飯はいりません。ビール一本いただけますか」酒とは縁の切れない先生であった。

「君！あの核酸の仕事をした野原と云うのがうちの野原先生だとは知らなかったよ」は近藤先生の言葉である。私が新潟に来てまず連れていかれたのが野原先生の部屋であった。オトウチャンとの話を聞いていると、どうもいくら頑張っても子供が出来ないという。なるほど生化学ならぬ性化学の教授だなと思ったりした。今でも忘れない。先生の部屋から出るなり、オトウチャンがニターと笑って「あれやりすぎだね」気が合ってよく飲みの相手をさせられた。うちが近かったせいか、先生のお宅に呼ばれたり、わが家にお越しいただいたりもした。先生の部屋は8階であったが、時々、3階で途中下車され、私のところに寄っていかれた。お目当ては酒である。「俺の部屋には赤提灯はブル下げてないよ」といいながらも、丁

度いい時にいい客が来たときひそかに喜んだものであった。

「洗面器一杯血を吐いたらしいから、もうあまり長くないね」島田先生についてお聞きした時のオトウチャンの言葉である。言った本人がとうに先立ち、言われた当人が元気に退官を迎えられたのだからまったく皮肉なものである。当時の先生は、顔は青白く、痩せ細っていて、まさに亡霊が歩いているようであった。

「生きているということは、反応するということです」といい、「野原教授はzweimal wöchentlichですって」というと、「君、それ本当で・す・か？」と一番興味、いや強い反応を示されたのは島田先生であった。「歯根膜は皮膚である」と言っておられた先生とよく飲むようになったのは、うちの大学院生が厄介になってからである。落ちつくところは仕事の話、顔を左右に振り振り、口角泡を飛ばして話される先生の何処にこんなエネルギーが潜んでいたのかと感無量であった。そんな話をした後は、いつも胸の中に熱いものと気持ちのいい清々しさを感じたものである。出された酒もうまかった。「夜遅く、一人でモーツアルトを聞きながら、菩薩像をほっているといいですね」と言われる先生が好きであった。

新潟では同期である大橋先生は医歯大では私の大先輩である。その先生も赴任当初は私達と同じ部屋で過ごされた。その後、自分達の教室に移られたが、それは元歯学部のある飯場のような建物であった。雪の日には病院まで傘をさして来て診療されていた。

大橋先生と私とは、学問的興味から研究の方向、臨床での考え方、はてには性格から趣味に至るまで対照的であった。「第二はやることに一本筋が通っている。第一は自由はあるが、秩序はあるのかな」なんて言われたりした。ヨーロッパ留学後は先生のご専門の領域は勿論、それ以外でも次々と新しい手法を取り入れられ、「新潟に大橋先生あり」と言われるようになった。先生の手術を見学し、その結果を回診で見て、どの論文よりいい勉強になった。ある二次会の席で、椅子にかけようとして床に尻餅をついた。それでも、「君！臨床はね！」という調子で、口調を乱すことはなかった。その先生も退官後は年ごとに柔らかくなって、すっかり付き合いやすくなった。一番教授姿が様になった教授がいなくなったのは寂

しい気もするが、これも時の流れであろう。数年前の同門会で、「僕たちはいい時に辞めたね」と感慨深げに語っておられた。

小澤先生の印象には一点の傷もなく研ぎ澄まされた日本刀のそれと重なるところがあり、とても近寄りたがたい存在であった。が、その印象は、「小澤先生ってキューピーさんみたい」の女房の一言ですっ飛んでしまった。家に帰って一杯やっていると電話がなる。「酔っぱらいがパパを出せって言ってるわ」と女房が怪訝な顔をする。出てみると先生である。呼ばれて一解に向かい、先生お手製の料理を食わされる。奇妙な味付けなのをビールで流し込んで、「うむ。今までに味わったことのない代物だ！」なんて言おうものなら、何を勘違いしたのか、「うまいだろ！」ともっと勧められる。大学院ゼミ後、数人の先生と私の部屋で菊水の五郎八を飲んだ。初めは警戒していた先生も甘い誘惑に抗し切れなくなり、盃を重ね、ついに目玉を回して意識不明になった。本人も吃驚され、教室でも大騒ぎになり、急遽入院精査と相成った。と同時に、これでますます付き合いやすくなったと内心微笑んだりもした。理想を求めてやまない先生にいつも男のロマンを感じたものである。

解剖実習開始時、ご遺体を前にして「諸君がこれからやろうとしていることは、ここ以外でやったならば、死体損壊罪に触れる犯罪です。将来医学者、医者となる決意のないものは直ちに退去して下さい」に、2、3人が出ていき、自主退学となった。昔の学生は反骨精神、今は軟骨精神？「ブロってものは、浣腸されても固いウンコを出すもんだ！」なんて言うとすぐに下痢をする。筍だって「藪」になるのを知ってか、その半分位は1mくらいで自ら成長をとめる。「とまり筍」である。それを知ってか知らずか、6年経つと、「一を知り二を知らずして」卒業していく。「刈り込み」がないからである。そんな学生との輪読会が退官まで続いた。終わるとビール。「朝寝坊、昼寝もすれば夜寝する。ときどき起きてうたた寝をする」学生も一斉に目を覚ます。肴は彼らが提供する教授、ライターである。明日は我が身とは気づかず、学生と笑い転げた。新「芽」に夢を託していた頃が懐かしい。

退官して16年、セピア色の記憶をたどってみると、教授冥利の20年であった。